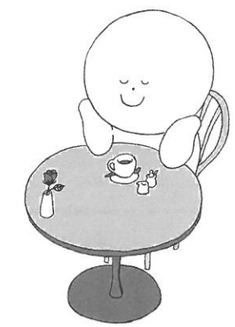
自閉スペクトラム症児者の心の理解



◉「理解できぬ世界は悪か ―私たちと彼ら、線引きする社会で」

これは、映画『万引き家族』について、作家の角田光代さんが寄稿した記事の題名です。[1] そこに以下の文章があります。「理解できないものを、世の中の人はいちばんこわがる。理解するために、彼らを…カテゴリーに押し込める。…そうして名付け、カテゴライズすることによって、世のなかの人々は安心するのだし、自分とは関係のないことだと信じられる」（傍点筆者）。

この記事は、映画やそのテーマである家族を題材にしたものです。一方この連載で考えてきた自閉スペクトラム症児者の、周囲の人からみると不思議だったり、なぜそうするのかわからないといわれる言動も、この「理解できないもの」と同じ扱いを受けやすいように思います。自閉スペクトラム症児者が、状況や相手の気持ちとずれた言動をし、トラブルになることがあります。会話はできるし知的な問題もないのに、なぜこんな簡単なこと（例えば、相手が嫌がっていると察すること）ができないのか「理解できない」。その居心地の悪さを解消するためには、自閉スペクトラム症を、相手の心を読む能力に障害がある（代表例が「心の理論」欠損仮説）とカテゴリーに押し込め「理解でき」るようにすることは、とても便利だからです。

一方、近年の研究は、心の理解そのものにいろいろなタイプ（スタイル）があり、自閉スペクトラム症児者はそのすべてに障害をもつのではないこともわかってきました。今回はこの問題について考えます。

◉元素記号の世界

知的な遅れはない自閉スペクトラム症のシオリさん。

第6回

ユニークな心の理解

別府 哲（岐阜大学）

べっぷ　さとし／岐阜大学教授。自閉症児・者の発達や指導をライフサイクルを通して研究。著書に『自閉症児者の発達と生活－共感的自己肯定感を育むために』『障害児の内面世界をさぐる』（以上、全障研出版部）など。現在、全国障害者問題研究会常任全国委員。

彼女は、化学が大好き。中学3年のころ、家で黙々とにかを書いていると思っていたら、それは元素記号でした。紙1枚に元素記号1個をあてがい、それぞれキャラクターをつくり、人物画、性格、得手不得手、家族構成、成育史などストーリーを書き込みます。最終的にそれは、スケッチブック3冊にまでなりました。

そんなころ、お母さんが学校の先生から電話を受けます。それはシオリさんがある女子に毎日昼休み、元素記号の話を延々と続け、相手の子が困っているという内容でした。相手の子はそれを避けようと、昼食後図書館に行きます。ところがシオリさんは、お弁当を図書館前の砂ぼこり舞う通路で一人で食べ、図書館で彼女を待ち受けるようになりました。先生によるとシオリさんは、最初はほかの子たちにも元素記号の話をしたそうです。しかしはっきり「その話、嫌」と言った子には話さなくなりました。先生に相談したのは、そう思っても面と向かって言えないおとなしい子だということでした。

シオリさんは小学校のころから、自分の好きな話題になると、相手が嫌がっていても延々同じ話を続けることはありました。それでよく「うるさい！」と言われます。しかしまた翌日には同じ子に話しかけ、よくトラブルになりました。今回（中学3年）も相手が嫌がっているのを察せず、同じ話を繰り返す点は小学校時代と同じかもしれません。しかし、「嫌だ」といった子に繰り返さなくなったのは、明らかにちがうとも感じたのです。

◉二つの心の理解

相手の心の理解には、はっきり言われなくても相手の様子や態度から察して理解するものがあります。一方、「こういう場合にこうすると、相手は嫌だ」など、言葉でルール化して教えてもらってわかるものもあります。前者を、理由は言えないがなんとなくわかる心の理解と